



福祉系

対人援助職養成の

現場から 57

西川 友理

社会人になる怖さ

社会人になるのが怖い、と言う学生がいます。何が怖いのか、と聞くと、「責任ある立場になるのが何か怖い。」という答え。

「責任の何が怖いのかな。」

「んー 何か…なんやろ、なんか、怖い。

“～せねばならぬ”ということが増えそう。重そう。」

「重そう？」

「うん、なんか重そう。なんかわからんけど……そういや、そもそも責任って何やねんやろ？責任って、何ですか？」

…と改めて聞かれると、何と答えたらいいものか、少し考え込んでしまいます。

何か取り返しのつかないことをしてしまった役職の重い人が、「責任をとって辞任する」という事はよく耳にしますが、「責任を果たすために辞めない」という人もいます。続けることも責任、やめることも責任です。責任ある仕事を欲しがるといえば、責任ある仕事を嫌がる人もいます。「〇〇について、責任は感じているのか」と聞かれると、何か事の重大性をわかっていないと責められているような気がします。「責任感がない人」というと、ちょっと一緒に仕事をしたくないなと思ってしまいます。

責任とは、何なのでしょう。

責任とは

デジタル大辞泉によると、責任とは「1、

立場上当然負わなければならない任務や義務。2、自分のした事の結果について責めを負うこと。特に、失敗や損失による責めを負うこと。3、法律上の不利益または制裁を負わされること。特に、違法な行為をした者が法律上の制裁を受ける負担。」とあります。なるほど、当然「負う」もの、時には「負わされるもの」。そりゃ「重い」はずです。

英語で「責任」は…

ところで、責任は英語で何というでしょう。辞書で調べると、2つの単語が出てきました。

Responsibility と Accountability です。日本語ではどちらも「責任」ですが、この2つは明確に意味が違います。

response(返す)に、ability(～できること)をつけて、responsibility、です。つまり、responsibility と表す責任は「反応できる」こと。何かを担当する際にこれから発生する責任を指します。

これに対して accountability は account(説明)「ability(～できること)から成り、この言葉が表す責任は、「説明できること」。行ったこと、終わったことや結果についてこれまであったことに対する責任を指します。

日本語で言う、責任を「負う」というのは、どちらかというところの「過去の後始末としての説明をせねばならない」という感覚がある accountability が強い印象を受けます。というか、それを将来的に引き受けるという事を先取りして「責任」と読んでいるように感じます。これに対して、責任

を「引き受ける」というのは、これから発生するあらゆることに自分が関係することだと引き受けようとする姿勢が感じられる responsibility が強い印象を受けます。

責任を負う、という言葉が重くのしかかるような印象を受けるのは、Accountability の印象が強く、responsibility の印象が弱いためではないでしょうか。

しかし、どちらの単語の意味も、「相手に対して、どう振舞うか」という事を示しています。反応するためには、まず、相手が何を言っているか、どうしてほしいと言っているのか、どういう様子でいるか、それを受け止めないとこれに応じた反応は出来ません。そう考えた上で、2つの単語の意味を合わせると、責任をとるとは「相手を“受け止めて”“反応”と“説明”ができる存在になるという立場を受け入れる」状態といえるかと思います。

支援者、保育者としての責任というのはまさにその利用者に対して「受け止め、反応と説明ができる私であることを受け入れる」ということではないでしょうか。

責任を負う？責任を引き受ける？

「…そういうことだったら、子どもに関わる現場に限らず、普段からしょっちゅうやってるでしょ。」

「？そうですか……？？」

「子どもや保護者相手、もちろん上司でも、先輩でも、同僚でも、誰が相手でも、話を聞かない、どんな様子が見ない、思いを聞かない、反応しない、答えない、無視をす

る・・・そんな対応、したいと思いますか？」

「いや、まさかそんなことしたいとは思わないです。」

「でしょ。だったらさ、今ボランティアや実習で、いや、家族や友人や、アルバイト先の人や大学で出会う人、その他、周囲の人に対してあなたがやっている、相手の様子を受け止め、反応し、説明できる私でいるってことが、周囲の人に対して責任ある態度でいられている、ってことじゃないのかなあ」

「それが責任だって言われたら、確かに出来ているかも。……そっか、責任を負わされる、っていうのが嫌なだけで、私、普段から責任は引き受けてるっほい。」

「そうそう、誰かに負わされるものじゃなくて、その部分の責任は私が引き受ける！って、そういう態度でいるといいと思いますよ。」

「うーん　なんかそういわれたら、責任を引き受ける！ってかっこいい。面白いかも。」

「うん、責任はね、負わされるより、自分からガッと引き受けに行ったほうが、面白いことが増えると思うよ。」

もう半歩、手を伸ばす

大阪にある「ゼロひゃく相談支援センター」の水流添真さんというソーシャルワーカーさんとお話していた時のことです。水流添さんは、“ゼロひゃく”の名前とおり、0歳から100歳まで、あらゆる人の支援について、地域を基盤に展開していくソーシャルワーカーとして、日々活躍していらっ

しゃいます。

現在、クライアントに対するソーシャルワークは一人の人、1つの事業所がすべて賄えるものではありません。地域の中で暮らしている人を対象にした支援は、あらゆる事業所、機関、施設、専門職、ボランティア、住民などによるネットワークで行われます。水流添さんは、自らクライアントを支援しつつ、関係するあらゆる人々のコーディネートも行っている方です。

「…そういう時にね、各方面に対していつも、あともうちょっと、あともう半歩だけ、手を伸ばして！って思うんです。」

と、水流添さんはおっしゃいます。

「例えばヘルパーさんが、あるお家に行くでしょう、必要な食事の用意やら家事やら、決められた仕事をするじゃないですか。その時に、“最近どう？”とか、“この前、〇〇にお出かけされたんですね、どうでした？”とか、そういうたわいもない会話をする、そういうところからでいいんです。たわいもない会話は決められた仕事じゃないですけど、単に決められた仕事をするだけじゃなくて、もうちょっとだけ、クライアントさんを知りたいとか、近づきたいとか、理解したいとか、そういう気持ちから出てくるあと半歩を、ネットワークにかかわるそれぞれの支援者が行うことで、より強固なネットワークが形成されて、その人に対する支援が豊かなものになるんです。」

「もしかすると、“責任の範疇を超えて、スタンドプレーをする”とか、“クライアントとなあなあの関係になる”という事を推奨しているように誤解されるかもしれないけれど、そうじゃないんです。」

「自分の仕事、自分の責任の範囲はここまでだから、それ以上はしない、じゃなくて、

自分の責任の範囲はこれだけとされているなら、じゃあその中で、このクライアントさんとその家族のために、どこまで自由に手を伸ばせるかな、どこまで自由にふるまえるかな、と考えるんです。その自由にふるまう部分は、自分が考えて、自分でやる！って決めちゃうんです。」

「そう考えると、出来ることはもっともっと、たくさんあるんです。クライアントさんに対して、そういう考え方の人が集まると、すごくいい支援ができるんです。」

相手を誠実に受け止めて応答する役割を引き受ける、その役割を担うぞ、と、腹をくくる。自分から責任を引き受けに行く支援職というのは、こういう人のことを指すと思うのです。

そして、このような支援職の方は大抵とてもイキイキとお仕事をされているようにお見受けします。

システムは明確に、運用は柔軟に。

私はよく、「システムは明確に、運用は柔軟に」という言葉を使います。その活動について、それぞれの人、業務、役職、組織は、それぞれ何の役割を担い、どういう機能を持つものか、といったワク組みをきちんと整えることにより、本人も、関係者も、システムに沿って安心して、見通しを持って行動することが出来る。だから、システムは大切です。これは責任の所在を明らかにするためにも必要なことです。

しかし、特に対人援助職は人同士の仕事、人相手の仕事なのだから、実際にそのシステムを運用する時には、柔軟に、システムに縛られ過ぎないということを考えたいと

思うのです。先に挙げた水流添さんのように、「そのクライアントさんのために、どこまで手を伸ばせるかな、どこまで自由にふるまえるかな」と考えて、自分の出来る責任を多少喰い気味にでも、引き受けに行く。そのほうが、充実した支援が出来ると感じています。

押し付けられた責任感と、

内側から生まれる責任感

「責任は私が取るからどんどん自由にやんなさい！」という上司の下で働く部下たちは、めったに失敗をしない、それどころか「自由にさせてもらえるなら、よし、これをやってみよう。やると決めたからには、頑張ろう。」と、むしろ責任感を持っていきいきと仕事をするようになる、と聞いたことがあります。

「責任をとれ」「責任をどう考えているのだ」と人から負わされる責任ではなく、「自分でやっていこう」という責任の面白さや楽しさに気付いた時から、仕事はがぜん楽しくなっていきます。そして、みんながそれと気づかず責任感を持って前向きに仕事をするから、トラブルは発生しにくく、働きやすい職場になる。

だからどうか、学生たちが、「責任は上がとるから、どんどんやんなさい！」と言ってもらえる職場に就職できますように！と願ってしまうのです。